



見得行感え所風多

通俗排悶錄卷之六

琦行之部

目錄

張龔
蘇門三賢

劉復
蘇門三賢

亞張
韓以平

夏嶋町五丁目
大野屋惣八

六
3144
6

趙遜

安成乞

徐妙錦

萬義顥

沈雲英

賣腐人女

益都人妾

合十四種

通俗排韻錄卷之六

琦行之部

龔翊

全亭正直

校



龔翊字へ大章。崑山名地の人。下と金陵地名ふ住せり。年十七ふして金川門の卒と/or。永樂帝(永樂へ明の年号)の時。て靖難(前よりの兵至ア)ー時。王穗(名)。异李景隆(將の名)。門を廻く。迎へ降參む。翊拒ぐ。ふ力ある。声をあげて大ふ哭し。其場を立退き。故鄉ふ還り。諸生ふ教授する。業と。貧ふ安じ。學を好む。宣德(年号)の比。周忱(其地の巡撫)。翊を薦(仕官せよ)んと云ふ。時。翊苦て目。翊今仕へん。義ふ於く妨す。然と共。若仕へま。先年城門の勤果の偽よ。さうん夏を恐ると云ふ。辨へく仕へ。田三十畝あり。自耕へく。食ひ八

十餘歲にして卒。門人私の安節先生とぞ謚して居。

張復

張復字子遠。休寧地の入ゆく或家の僕うも學を好み。黃梅顯雀九思と云入よ従ひ。性命の奥を極め。黃列ゆく學を講じけふ。黃列の人舉く瓦を尊ひ。張夫子とぞ呼ぶ。ある時瞿九思冤を言ひて獄に入まば。張復徐孺子と共に京師に至る。鳳閣の下に上書して。其罪を免め放す。時の首輔張居正。張復が名を知り及び。其家に招かれて物語し仕官。と云をきけとども。従へざりて遂に古鄉に歸る。再古主の家に僕と成れ。茅屋を築。自耕して母を養ひ居る。鑿下語四卷。孝經本則一卷。小兒語一卷を著する。さまとも郷人其有道あるを知る者あ。呂祖の令下に語一卷を著する。さまとも郷人其有道あるを知る者あ。

卷。其村に至り。張夫子の居ひづくぞと訪け共知人。縉紳のある人をたのまく。やむをきうふ。漸ゆ者云へる。某の僕久く。楚地に居て帰り。後又其主の仕う者。其者姓ハ張。あり。此者あり。張夫子と云ひぬ。とぞ答へる。其僕といふ。則張復みくぞ五屬。縣令重づく縉紳と同く。其家の従く張復を拜。山を繞て逃走。令ハ空く。其堂ゆく。四拜。去る。郷人そよ下る。張復が道を抱き。義を好み。然も賤な僕隸の引く。安んじて居る。車ひ。下賤の人ゆく遇せぶり。張復は終ひ此地み終。今に至く。黄列の臨坪鎮名。張夫子の祠ある。

蘇門三賢

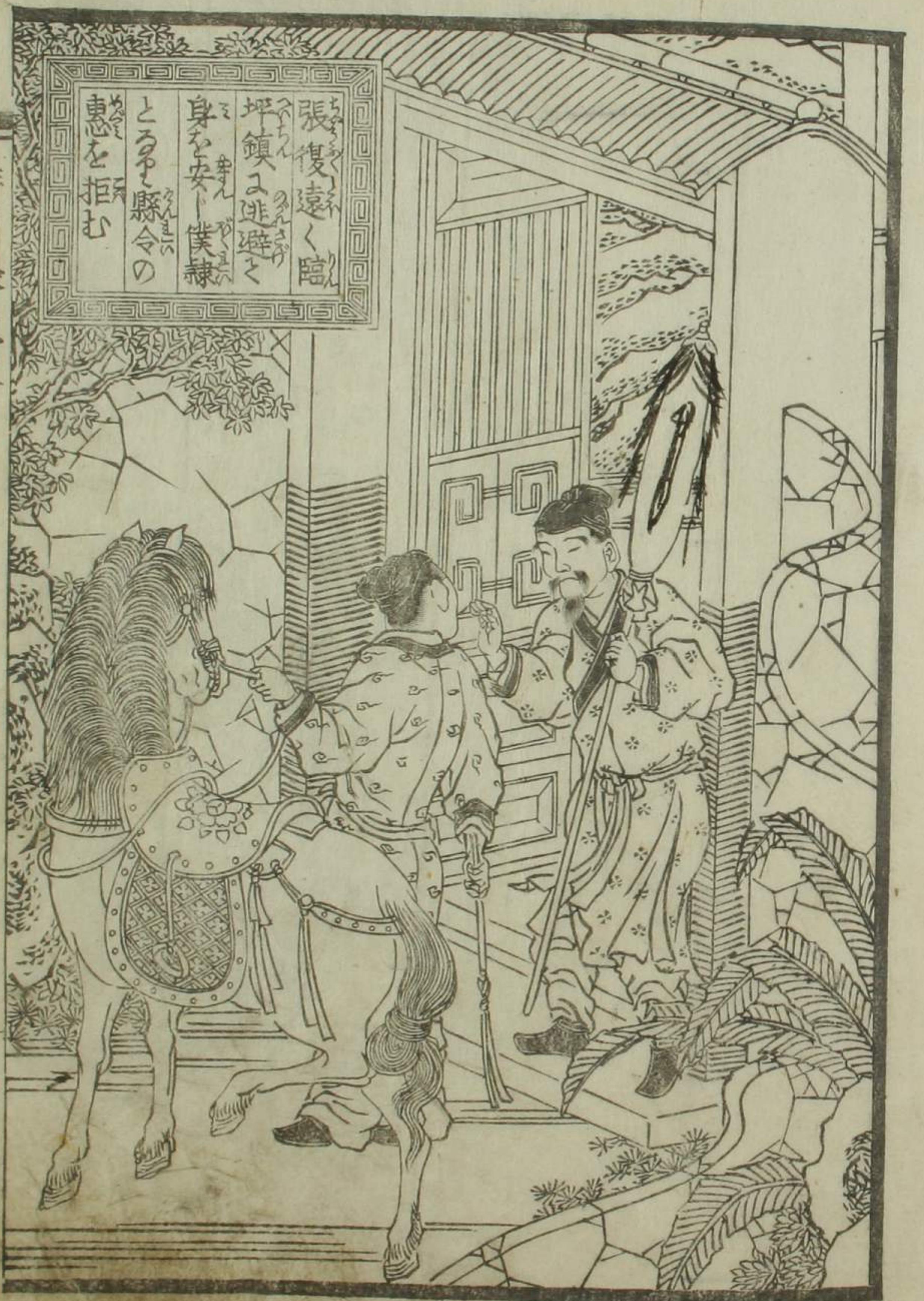
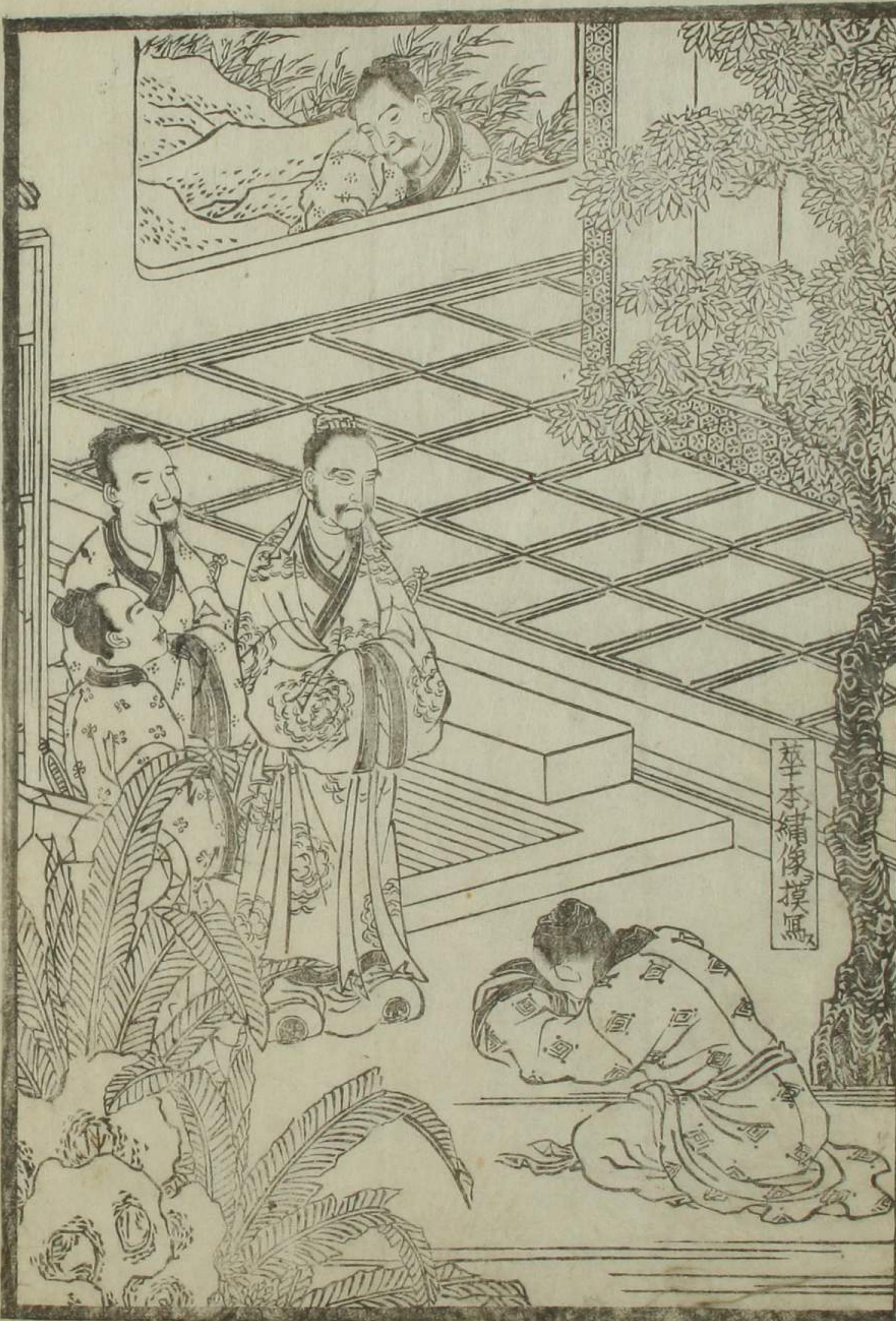
張果中字へ千度。容城地の人。少を時鹿善繼と云人の従ひ学

びへる。後左淳邱。魏廓園。と云賢者の官官。禁裏の側。のうち難かむ。
そ都又召へ向ひ。一時皆張が家を宿すしてより。其後張が孫徵
君えあら。後ひと蘇門の入る。遠く世よを避け隠かく。此地かゆく終まつり。夏峰村
の北原やから。葬さむ。徵君めいぐん其傳つを作つくり。同時小彭こひら了凡りょうはんと云入る。蠡縣いのくにの入る。
舊き諸生しやうせい学がくの入る。後河朔かくせき地じの來くわ。徵君めいぐん又後ひと居ゐ。此土の
人粟じんそくを與あき。びを受うけ。竟かなふ嘯臺きゅうだいの傍そば。徵君めいぐん其墓その小賊
夫墓めいと顧みる。又理鬯りぢゆう和わ字じハ寒石かんせきと云い。西華せいが名なの入る。本姓ほんせい李
氏し。亂らんを終まつく。皆散失さんしき。徵君めいぐん西華せいがの左令さゆう。書しょを貽いたす。理めい老母おも幼わい
孫そねを恤あた。振ふへ。理めい魯仲連ろくちゆうれん。古いい。後ご入る。と云い。

劉以平

劉以平字ひらひら近塘きんとうと云人。猗氏あしじ地じの產うぶ。同姓どうせいの閼氏ゑじの女めのを聘ひん。未引
取と。其中うちの女めの病びやく出來で。廢人ひきじん。故已よむるを得え。竊くわ々くわ次つぎの女めの
をそりえ遣し。合あ色いろの夜よ。以平いへい女めのの病びやく。容ようううを憐あ。媒めい尋さええば
主おもく棄き。不義ふぎ。且あ嫁よ。ええる事ことを悲ひ。命めいののよよとも。豈か
哉哉。然あとと。次女じよ。我家わたくし。よよつ。を還もど。も道理ぢのう。是これが第だい以
寬ひろ妻め。トと。止とど。置おき。更また。姉あね女めのを迎むか。女めの果こ。嫁よ。得え
ざざ。を悲ひ。自害じがい。居ゐ。居ゐ。と。以平いへい。迎むか。嬉うれ。思おも。故ゆゑ。
病病。も程ほど。愈ゆ。兄あ弟だい。同とも日ひ。婚こん礼れい。す。け。後ご。萬曆まんり年と。庚申こうしんの年と。

本繪像摸寫



以平進士とあり。

韓增

項城の韓增と云人。戚氏の女を聘へるが幾程もあらずて其女と盲目とあり。名の父母名ふ韓增少年よりて文を能せり。定く行末常並の人す。あらじ。然るかに目女を與へて婦とせらるる甚不可あり。所産娘を棄す。女生涯家ふ終らせんと名ひ定め其由を。韓增家み言遣はば。韓增が父母へ言ふこせる如くよせんと。ひけと共韓增聽だ。遂に親迎へ。戚あるとを得て。とく美女を止む。夫婦の好を全くせざる端。とく其婢を直ぐへ人情。かかる美女を止む。夫婦の好を全くせざる端。とく其婢を直ぐ還へ。後韓增。壬子の年。鄉選又參り。教諭の官役名とあや。婦を

推す偕み行き。始終甚睦。豫列の入其駕行を稱。宋の劉廷式復此世ふ見え。アリとぞ言ける。

張二

訛者張二と云者。何圃の人と云。安定。善水中に入。又能一月も食ひ。ぞと居る。其上飛走甚捷。嘉靖辛卯甲寅の年。日本。の海賊の乱。太守の催み応じて兵卒となる。利器を持て水ふ。敵の舟底を鑿て舟を沈め。或も敵陣ふ忍入て首を取まし。太守銀牌を與へ。と。擣へ共受け。酒を與れば則受う。敵退をく復其功を論じ。百户城賜ふ金をふ當。玉石。依て郡縣より。其相當の章服を授け。とも皆辞。く受け。舊の如く訛者とうり。嶽廟の中ふ臥し。平常少く。愁ある。

色うるゝ。其始如何う入ゆくありうるか。斯う大難を解き。大功とす。
く富貴を辞せ。へ昔日の魯仲連が行事よく似たる人ある。

亞塙

亞塙と云者。廣東增城縣名の獄卒也。性質朴く誠也。萬曆年
戊午の歲の暮。囚人五十餘人聚アシ。泣居するをて。亞塙何故ぞと
問ケ。囚對曰。新歲正月近づき。邑の者共ハ父母妻子。聚アシ。喜びい
そん。我等ハ此獄中ふ居。還るるを得ざ。故ふ悲うりと云ケ。亞
塙首を傾ケ。暫思案。居ク。と囚人等ふ向ひ云。傍ハ其ハ安ニ
賣キ。但汝等我の義理を忘る。云々。囚皆怪く其故と
問ふ。亞塙曰。我今爾等ふ暇を与へ。還ま。正月二日。皆悉獄へ歸。而
來。必約ふ違う。我私ふ爾等を縱。其罪死を免ま。す。
ち。此中入ふもあらざる者あらず。我死罪ふ陷らん。必せ。况や
悉く返さる。然ど。今日。紳介等をとく人置く。家ふ還さ。ととも
若我壽命盡。必死を爲す。畢竟如何。死するも同事。一。ひ快だ
るをあ。死せんといふ。と悉縛。と家ふ還。明年正月
二日。囚人皆悉帰。而來。籍を扣く。名を呼。改ふ。一人も逸つ。不う。す。
け。亞塙掌を持て。大ふ笑。善哉。と云畢。其ヤ。跋坐。と死。す。
囚人皆哭。其體を沐浴。と潔とぬり。と收め。此。縣令
安。令より。巡按御史。言。上げ。朝。失へ。達。其縣の獄神。と。す。
る。今。ふ至。る。か。祠。みわ。ギス。から。く。疾病疫癘の類。壽。生。必。驗。あ。

来。必約ふ違う。我私ふ爾等を縱。其罪死を免ま。す。
ち。此中入ふもあらざる者あらず。我死罪ふ陷らん。必せ。况や
悉く返さる。然ど。今日。紳介等をとく人置く。家ふ還さ。ととも
若我壽命盡。必死を爲す。畢竟如何。死するも同事。一。ひ快だ
るをあ。死せんといふ。と悉縛。と家ふ還。明年正月
二日。囚人皆悉帰。而來。籍を扣く。名を呼。改ふ。一人も逸つ。不う。す。
け。亞塙掌を持て。大ふ笑。善哉。と云畢。其ヤ。跋坐。と死。す。
囚人皆哭。其體を沐浴。と潔とぬり。と收め。此。縣令
安。令より。巡按御史。言。上げ。朝。失へ。達。其縣の獄神。と。す。
る。今。ふ至。る。か。祠。みわ。ギス。から。く。疾病疫癘の類。壽。生。必。驗。あ。

だらりのり。

趙遜

順治年もとめきをとの初京都ひつに趙遜とうそんと云者いふものある。水みずを賣うるを業うぶとし。廿歲餘ありにて父母おやぢをあく。妻めもゐゐて。朋友ゆうじゆ共各助すけ力ぢから。婦めを求めしむ。市中いちちゆうで女人じんじゆを。銀ぎん二百両りょうを買い來きて。叔合おじあわせ盜ぬすびをまざまざ。時とき回まわの蒙もよ。帖あわせを取とえとけ。白髮しらはの老嫗おじやを婦めとます。有ある。趙遜とうそん興おきる。老嫗おじやとます。吾母ごぼとます。事ことへん。勝かつす。以ひく老嫗おじやを婦めとます。有ある。趙遜とうそん興おきる。老嫗おじやとます。吾母ごぼとます。事ことへん。勝かつす。世話せわをます。玉たまと云いふ。老嫗おじやをます。許容きゆうゆう。斯このく。數日すうじつ。之の經つらる。此この嫗おじやをます。あらう。甚殷勤じんじん。一いつ々いつ嫗感おじやかん。トとく。曰い。汝朋友ゆうじゆの助すけ。トとく。妻めを求めん。不華ふけ。我わを買い。財ざいを。妻めを。皆失ふれ。吾母ごぼ。

みくらへる珠たまあり。冕めんを以ひく。再び妻めを求めべ。帶たすきの中なかに縫ぬいて置おき。珠たまをかく。與あへ。即すこし。銀二百両りょうを易か得とく。又市いちふ往むこうく。女めのこを一人ひとり買いふ。此女老嫗おじやを一目ひとめ見る。大おほい。天あま一いつ。故ゆゑ。遜怪とうがい。尋問じんもん。即すこし。其嫗おじやが女めのこである。世の代よのもの。古いき。明あきら。亡なき。今いま。逢あう。離散りさん。後各所ごくしょく。流浪りゅうろう。入いく。逢あう。此家このいえ。始はじく。相見あう。嫗おじや。洪洞こうとう。地じの入い。舊きき。仕官しがんの家いえ。甚富ぜんふ。采うえ。男おとこ二ふた人じん。有あ。兵亂ひょうらん。甚ひん。斯このく。成家なまこ。今いま。母子ぼくし相聚あつしゆ。故鄉ふるさと。歸か。藏くわ。玉たまを取とう。成家なまこ。今いま。頬ほあらう。悉賣おひき。路費ろひ。嫗おじや。夫婦ふうふ。打連うちれん。家いえ。帰か。二ふた人じんの男おとこ。迎むかへ。思おもう。大おほい。喜うれい。家財かざい。三分さんぶん。二ふた人じんの男おとこ。一ひと生いっせい。富ふ。也よ。今いま。趙遜夫婦とうそんふうふ。與あへ。今いま。趙遜夫婦とうそんふうふ。與あへ。是そこ。多おほい。富ふ。成なまこ。夫婦ふうふ。睦むつむつ。

一生を過へるとあや。

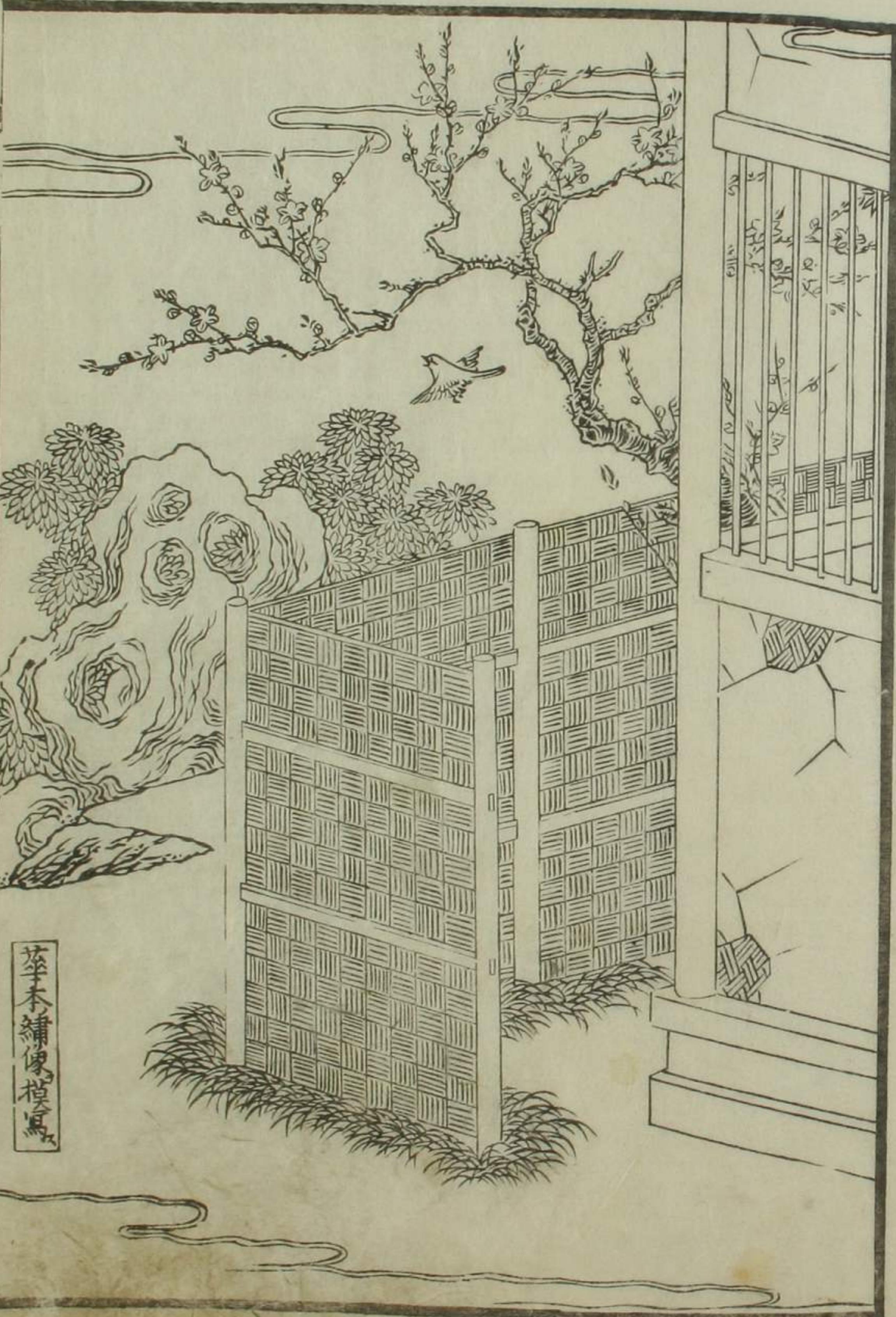
安成乞

吉列の安成地ある。項の下の大きな瘤あり。其姓名を知る者有。乞入をども生得施を好く。負ひ者ゆべ已が入ふ乞うる米錢を與へ。若耶く乞うる者ゆん。其殊みえに時を同ぐ。未と其家の持徃と預け置き。終ふ取行ぢて。其地の一人の娶婦あり。女童木の能へど。彼乞入此を見よ。夜薪を荷て其門口の置く歸る。終ふ入ふ。居らざり。其里の小路みよせる橋。損ト壊る。此乞人土を荷ひ運び。入しく修復。故郷入よく其義め感。此入一度物を乞得す。家。其年一とせ行事す。常々入ふ。我先代ハ富豪。金錢

と入ふ貸す。利息を取らうある。過剰あり。故其報我來や。斯乞入と。其上廢わ。身自由あ。と云う。賢乞人あ。日。此乞人を貪ら。善を勧く。倦怠。先代の爲め罪をやどせ。且そ世の中ふ乞正直を。心の賤を者共のある。懐へりんと。やとぞりひ。

徐妙錦

明の中山武寧王。名。徐達。四人の女あり。姉ハ燕王の嫁す。燕王帝位即時皇后。則仁孝文皇后。次ハ代王の嫁。妃とある。其次の女を妙錦と云。美色あ。入ふ嫁せ。其妹を安王の妃とあれ。洪武の年。末。諸の藩団。静。己。代王も獄。妙錦。熟世の形勢。又。感。ト。誓。立。嫁せ。諸王。娶。婚。求。共。皆拒。許さ。長姉



萃本繪像模寫



趙遜妻を
求めんと七

誤りく二百両

老嫗哉

買ふ

仁孝文皇后崩。後文皇帝。妙錦が美色あらず。然も賢き。
を愛く。聘とて后とて玉へんとて。内使女官を其家み遣し。其旨を
諭す。妙錦病を言立て出で。女官其臥榻の下み徃き視焉。妙錦を
衾を被て呻吟し居る。女官假病あらんと察し。叩頭とて命を受
玉へと請け。已むるを詮びて。起上アシく曰。吾貞容ともあらず。六宮
の選ふ備へらる。無事非す。と云。身を女官跪く。審ふ其顔色容貌成
視き。清らか美事。怡も天人の如し。急ぞ帰く。有のすみ奏しけり。
妙錦も再命のあらん。を恐き。身をく。髪を剃く。尼とす。天子
此の成彼より。重く別み皇后を。立玉へぞくと。天子崩と。後又
初の容ふ復し。彦。宣德年。初。張太后。妙錦の行ひ。察を。成彼及

玉ひ。女官を以て京め。徵を道の程へ中使ふ命とて。守護せしもの既に
宮み入て。太后み見え。自徐達が第二の女と称し。と肅拜す。其形義
端正。一歩も違ひぬ。太后以下皆尊敬。玉ひ贈物ヨリ。あ
は。宮女共ハ各竊ふ語。と曰。此人をも。命を解し。皇后み乍ら。人
人有ふ心。を置ある。後正統年中。身ありけれ。鍾山地。家の墓
所。み葬。而名。始燕王の師。京み至り。時。建文帝。明。自焚死。玉。妙
錦。乞を以て。日。を。ひ。軍。至る。帝。之。殿。上。坐。燕王。待。王。ひ。嘆
エ。す。そ。帝。を。さ。し。か。そ。自。天。子。と。歎。エ。万。左。あ。ん。時。か。死。玉。と。も
涙。か。う。じ。何。故。遽。て。焚。死。玉。ひ。や。と。云。誠。見。識。も。高。キ。ナ。

義顥も鄆縣の萬氏の文也。祖父ハ萬斌高帝ハ從兄也。兵を起
一指揮の官也。北征戰也。討死す。其子萬鍾其職祿をつぐ。即義顥
父也。是も遜國の難み死也。義顥が長兄萬武其跡を襲。是も亦
交趾地ヌク死した。子も故其弟萬文も死。射龍將軍と
アモ。海賊を禦て海中で死した。萬文が妻吳氏懷妊一居る程も男
子を産め。名を全と云。其時萬文が母も存生あらず。嫂陳氏ふ子也。義顥
盛年も至らざれむ。骨を求むる者多矣。義顥家の漸々衰へるを
見く嘆く曰。吾家三代の間、四人まで困のう死。皆骸骨え家の帰
らば。今娶婦三人家となり。一人の孤を守立んと。誠ふ祖宗の血脉也。
唯此孤入よだ。我乞捨るふ忍びず。其上我若嫁せば家の爲め一臂残

失ふう如く。悉く井手やけの家内も義顥を頼みよがひ居
在り。強とも嫁を勧め。義顥日夜三人と力を戮せし。小兒を撫
育一家を治め。年月を経て全己が成童。父の官を嗣ぐ。其時義
顥もづく先祖以来の戦功。并の困の爲め死せる。其共を見る如く。書
はげく全員與く心を勵く。先祖以来の志を承續。と教訓。後義
顥も七十歳近く。卒。全其喪を勤める。母の如に。萬氏の子孫も是を祀
る。射龍將軍と坐を列ね。世も絶ゆまじ。

沈雲英

沈雲英も長巷里の沈氏の女也。父至緒。崇禎四年。武科武藝
の進士。云英幼てより父を隨て。京と往来して騎射を能く。

九歳すく始く論語を讀く。あと心付この有る。終学を受へる。成請うふ期年ゆく四書又は孝經文誠よ通ド。其外唐詩宋詞の類一二び目を経ねば。その記憶一く忘れず。そとて塾師が從く。経の難な者を受んと請ひを。塾師まろのち春秋胡氏傳を授名。明朝のほ式春秋ゆく士を擇む。必胡氏傳を以て題と。其内よ傳題と云ふや。混雜一く條理あらゆる故。強記の者朝夕此傳頗戎。研え窮むと雖共。十又五も忘失一く。故學ぶ者多く此を難く。然るふ雲英ハ。一二び指授を得れば。悉通曉く。老師宿儒ゆも芳らば。やう。崇禎十六まふ父道別の守備。要害の雲英父。又隨く任ふ往く時み流寇道別を侵す。父出く戰ひ。麻攤驛の名ゆく賊を破り。

其渠帥を陣前小斬。賊を懼と。他列へ徙去らんとせし。其時大雨。あて然も至緒。左體の割を被り居血流。韓勦みまち。馬上ト。自由うづぐ。體を踏むべく馬より墜ぬ。賊の奇兵をと。競ひ懸く至緒を殺し。其屍を掠めり。雲英其時二十歳。此を彼と齊し。甲冑一く馬を跨り。十騎を帥く。賊の砦に迫り。賊の隊伍整え。賊大駭。再至緒。其屍を奪はんとせし。時をり。惠王。桂明の王子。吉王の三人。行列へ走り。三十餘人を討取。終ふ父の屍を奪く。上雲英。驍勇うえ。容易に克難。一名若ひ。忽其地を引取。其時。王聚奎。閏別の巡撫。此由を奏。降勅を請け。則

至緒の昭武將軍の跡を贈り。其祠を麻難驛に建て。一子を召せり。監國子監へ入る。雲英を遊擊將軍とす。父の士卒を悉領せしむ。其時雲英が夫賈萬策を荆列の南門を守て居る。荆列も流賊の攻破され。萬策は節の死して。雲英此由を空く號呼じ。吾命は絶えられ。萬策へ節の死して。雲英此由を空く號呼じ。吾命は絶えられ。云々。天と詔を辯し。父の柩を扶て家へ帰る。其後清の師西陵地を渡り。時雲英川の身を投死せんとしける。母をうごめし放て命助を乞ひ。貧くして世を渡り難をぬ。家祠の傍に塋を立て。一族中の見共を訓け。其族中の胡氏傳を習ふ者を皆雲英を師とす。云々。天と詔を辯し。朝を観歸り。歎く曰。吾久しく此土の順治十七年白洋海上ゆく。朝を観歸り歎く曰。吾久しく此土の居る事能へどと云く。塾中の児を百家へ返し。沐浴して臥し。頃を

卒一ノト。

賣腐人女

毫列の豆腐を賣る業にて居る夫婦の者也。本を北京の産ある。仇を避く南方へ來る。毫名又住る。十年餘を歷く二百金を貯め。女子一人也。年十五六ゆく美色あらじ。同邑より聘せんとも房者多し。女の父母計く曰。吾本北人ぢや。先祖の墳墓親戚皆北方小豆。行ひき故郷へ還らんと欲す。然るべ今此地の女を嫁せん。往來甚遠くへく便わ。已ふ故郷を去く十年余。仇ももや盡ぬべ。然れば今女を貰へく。故郷へ還る。親へた家を擇み。女を嫁せんと欲す。如何と云。妻へ婦もむと同し。頃く旅の裝し。鹽二匹雇ひて婦と女とを乗せ。父を

歩行しき道を急ぐる。二十里許も來てさんと坐ふ。馬を騎く弓刀を
携ふ。西への者ふ行遇ふ。彼者共女の美貌うるを視く。強く女を抱て
己が馬を擡上げ。策を加へて馳去る。夫婦のもの大駿を追懸て走す。
哀く女を乞へ共賊許す。夫婦の者の曰。吾五十金の貯也。願く其金ゆく
女を贖んと乞ふ。猶許さず。次第又金をヨロク。終く二百金を告ぐ。
其金を取く。而て女を返せ。亦走て。泣號が是も同く殺し。又
刀を抜く。斬殺す。婦籠をえく。亦走て。泣號が是も同く殺し。又
馬を馳く。數十里を行焉。道の傍ニ井あり。水を汲み。女伴と口渴りと云
れバ。賊共少女子恐ろし。足らば。女を縛て。下に。水を汲んと走る。女
其器也。女指さる。前の高櫻の家は吸器もべーと云けれど。実もモ入
其器也。

吸器を借み往。傍が女を今入の賊の少く怠氣。同く井の中み躍へる。
賊周章居る處。一人の賊已は吸器を借来す。此形勢をうそ。急ぐ吸器
繩よ縛て井ふ入。女を縛て。上ある賊頸を引上げ。縛を解て復縛を
下す。井中の賊其繩をひみ結付。當時。上の賊身を屈めみを出。し
力を出一く引上んと。女をもろとす。力は任せ。後より賊を突き。誤
室井の中へ突墜し。まぐさる。賊の馬を跨ぐ。高櫻の家ふ馳往。有事
事共を詳く語られ。村人皆女を隨ひ来。井中を視て果て。二
賊あ。引上視。一入へ頸を突折く死する。今入を以て死す。二
賊の刀を抜く。忽其首を斬落。女を。奴賊の橐を搜す。索め。奪す。
一百合金。其儘ある。村人女を伴て。其別の守ふ詣る。女賊も逢へ。女と父母



の死せらる。其仇をむくへ形勢共の始末を詳々訴へけり。守其金武吟味一杖人を遣へし。其父母の屍骸を尋ねせらる。女の言少しそ違ひりけり。守大の奇と稱へし女み向て曰汝父母又離れる。入故郷又久もつま。身を寄すべ死吾幸よ子す。汝を吾子と一婦を擇る。帰る共何方へ身を寄すべ死吾幸よ子す。汝を吾子と一婦を擇る汝を嫁せんと名ふいまと云はば。女稽首一く謝。其言又隨ひくる。守まうち女を署み迎へへも。悉く守の眷一諸生の才ありといひを迎。何某と云者を婚と定め。女の金を倍し。猶躊躇うべく嫁せしめけ。此事を傳へ聞者。女の奇節と守の盛徳を感トタ。康熙年中の事也。

益都人妻

益都の西鄙地。名ニ何某と云者。妻をかへらふ甚美うや。嫡妻嫉妒とく日々み筆を加へ。地道よりてきつけた。妻少しき愁める氣色うや。乍。或夜強盜十餘人其家みかくみる。夫婦の者怖ひ戰ひ居たゞ。此妻暗き所ども。杖一つ提ぐ出来。真先に進る。賊三四人を忽々撃暗す。自餘の賊恐れそ皆遁奔る。妻声を勵へし。曰鼠の如き奴原吾杖を汚さず足とねを。參りく命を預かくう。重くすゑべ急命を失そとぞ罵る。賊去く寢主。何とく斯とあえふと問ふ。其父と少アルド。武術を受け居る。悉く女と傳へる故此妻も百人の敵を有す。何故と妻が非道ゆ負ふをりると問へ。妻の處者へかてある。苦うと答ふ。是後も夫婦共に此妻をえ怪一め。鄰里

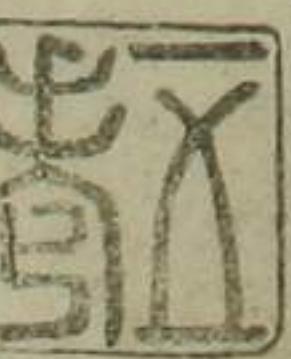
の者ゆまでも重かんト敬きよひを爲なとそ。

通俗排悶錄卷之六

長嶋町五丁目
大野屋惣八

東都

六樹園翁譯



溪齋英泉畫

紫嶺齋可志丸淨書

宮田吉

原喜

智

彌

刺

文政十一年戊子孟春發販

東都書舗

角丸屋甚

助

中村屋幸

藏

伊勢屋忠右衛門

